慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	桂陵・馬陵の役故事考
Sub Title	Studies on the stories about the battles of Maling and Guiling
Author	須山, 哲治(Suyama, Tetsuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.79, (2000. 12) ,p.62- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00790001-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

桂陵・馬陵の役故事考

須山　哲治

一

桂陵・馬陵の役は、中国戦国時代の中期に、斉国と魏国との間でおきた戦争である。この二回の戦いの詳細は『史記』や『戦国策』などに記されていて、特に『史記』孫子呉起列伝に見える馬陵の役のエピソードは、斉の軍師孫臏と魏の将軍龐涓との因縁や、結末の劇的なクライマックスなど、話としてもよくできていてかつ面白く、我が国においても歴史小説の題材としてよく取り上げられており、非常によく知られている。ところが、この様に一見親しまれていることに両戦役の故事ではあるが、『史記』『戦国策』の記載を比較してみると、実は様々な矛盾や疑問点が含まれていることに気がつく。

言うまでもなく、こうした矛盾は筆者が初めて指摘するものではない。『史記』や『戦国策』には、三家注を筆頭に膨大な注釈や校訂が諸先賢の成果として残されており、その中で、記載の矛盾という問題についても指摘され、考察さ

れてきた。しかし、それらの研究はおおむね、あくまで記載の是非を明らかにすることを主眼においた、いわば歴史的真実の究明を中心にしていたと言ってよく、矛盾が起こった理由や背景について論究するという視点には乏しかった。

ところが、近年に入って様々な角度からの研究が進んだ結果、『史記』の記載の中に説話資料の類に基づくとみられるものがあることが明らかになってきた。[1] またさらに、出土文献と『史記』や『戦国策』との比較研究から、いわゆる戦国故事について記した故事資料の実体の一部が解明され、これらが『史記』や『戦国策』の原材料となっていることもわかってきた。[2] 同時に、『史記』や『戦国策』が、当時残っていた文献や資料に取材して出来ているという性格を持つことが、改めて強調されるようになった。

こうした事実は、桂陵・馬陵の故事に見える矛盾についても、新たな観点を提供する。これまでのように、こうした矛盾が司馬遷や劉向が過ちを犯したことにより発生したと考えられる一方で、単に『史記』や『戦国策』を編集する際に取材した資料の中に、互いに矛盾するいわば異説が記されていたために、こういう現象が起こってしまった可能性も想定できるのである。

本稿では、この観点をふまえて『史記』や『戦国策』を中心とした諸文献に見える桂陵・馬陵の二つの戦いの故事の矛盾点の内のいくつかを取り上げ、その矛盾が、桂陵・馬陵の役に関して、漢代当時異説資料が複数存在した可能性を示すことを説明するつもりである。[3] 並びに、それらの矛盾がどういった理由や背景によって起こったのかについても考えてみたい。

二

まず桂陵の役に関する故事を中心に見てみたい。田敬仲完世家に、次のようにある。

二十六年、魏惠王圍邯鄲、趙求救於齊。齊威王召大臣而謀曰、救趙孰與勿救。騶忌子曰、不如勿救。段干朋曰、不救則不義、且不利。威王曰、何也。對曰、夫魏氏并邯鄲、其於齊何利哉。且夫救趙而軍其郊、是趙不伐而魏全也。故不如南攻襄陵以弊魏、邯鄲拔而乘魏之弊。威王從其計。（引用S1）[4]

（斉威王）二十六年、魏の恵王が邯鄲を包囲した。趙は斉に救いを求めた。斉の威王は大臣を招集し、「趙を救うべきか、救わざるべきか」と相談した。騶忌が言った。「救わない方がよろしいでしょう」段干朋が「救わなければ不義であり、また不利でございます」と言った。威王は、「何故か」と言った。段干朋は、「そもそも魏が邯鄲を併合したら、斉にとって何の利益がございましょうか。また、趙を救援に行き、趙国の郊外に軍をしきましても、趙は伐たれず、魏もまた無傷という事になりましょう。ですから、南のかた襄陵を攻めて魏を疲弊させ、邯鄲が抜かれたら魏の疲弊に乗ずる、というのが最上の策でございます」と答えた。威王はその策に従った。

この記載に続いて、

其後成侯騶忌與田忌不善、公孫閱謂成侯忌曰、公何不謀伐魏、田忌必將。戰勝有功、則公之謀中也。戰不勝、非前死

則後北、而命在公矣。於是成侯言威王、使田忌南攻襄陵。十月、邯鄲拔、齊因起兵擊魏、大敗之桂陵。（引用S2）

その後成侯騶忌は、田忌と不仲になった。公孫閲が騶忌に言った。「あなたは何故魏を撃とう謀らないのですか。そうなれば、田忌が必ず将軍となるでしょう。戦いに勝って功績があれば、それはあなたの計謀が適中したという事になります。負け戦となっても、田忌は進んで戦死するか、そうでなければ退き逃げるでしょう。そうなれば、田忌の死命はあなたの手中にあるという事になります」そこで騶忌は威王に進言して、田忌に南のかた襄陵を攻めさせた。十月になって、邯鄲が抜かれ、斉はそこで軍を起こして魏軍を攻撃し、桂陵でこれを大敗させた。

とある。また田敬仲完世家ではこれに続いて、田忌が桂陵の役の後、鄒忌の策によって出奔する羽目になる話が載っている。

三十五年、公孫閲又謂成侯忌曰、公何不令人操十金卜於市、曰、我田忌之人也。吾三戰而三勝、聲威天下。欲爲大事、亦吉乎不吉乎。卜者出、因令人捕爲之卜者、驗其辭於王之所。田忌聞之、因率其徒襲攻臨淄、求成侯、不勝而犇。（引用S3）

（斉威王）三十五年、公孫閲がまた騶忌に、「公はどうして、誰かに十金を持たせて市で占いをさせ、『私は田忌の臣下だ。田忌は、三度戦って三度勝ち、名声を天下にとどろかせた。謀反の大事をなそうと思うが、吉だろうか、凶だろうか』と言わせないのですか」と言った。占いを依頼した者が去ったので、別の者に命じて占いをした者を捕らえさせ、王の前で取り調べさせた。田忌はこれを聞いて、徒党を率いて臨淄を攻め、成侯を捕らえようとしたが、敗北

し出奔した。

これもいわば桂陵の役の後日譚である。以上が、桂陵の役に関する田敬仲完世家の記載である。

ところで、『史記』のこれらの部分と類似した記載が、『戦国策』斉策一にも見える。比較のためここに引用する。なお、紙幅の都合により、日本語訳は省略する。

邯鄲之難、趙求救於齊。田侯召大臣而謀曰、救趙孰與勿救。鄒子曰、不如勿救。段干綸曰、弗救、則我不利。田侯曰、何哉。夫魏氏兼邯鄲、其於齊何利哉。田侯曰、善。乃起兵、曰、軍於邯鄲之郊。段干綸曰、臣之求利且不利者、非此也。夫救邯鄲、軍於其郊、是趙不拔而魏全也、故不如南攻襄陵以弊魏、邯鄲拔而承魏之弊、是趙破而魏弱也。田侯曰、善。乃起兵南攻襄陵。七月、邯鄲拔。齊因承魏之弊、大破之桂陵(5)。（引用Z1）

成侯鄒忌爲齊相、田忌爲將、不相說。公孫閈謂鄒忌曰、公何不爲王謀伐魏。勝、則是君之謀也。君可以有功。戰不勝、田忌不進、戰而不死、曲撓而誅。鄒忌以爲然、乃說王而使田忌伐魏。田忌三戰三勝、鄒忌以告公孫閈、公孫閈乃使人操十金而往卜於市、曰、我田忌之人也、吾三戰而三勝、聲威天下、欲爲大事、亦吉否。卜者出、因令人捕爲人卜者、亦驗其辭於王前。田忌遂走。（引用Z2）

今、『史記』『戦国策』の両文を見比べてみると、非常に良く似ていることに気が付く。例えばS1とZ1を比較する

と、『戦国策』の方は、「其於齊何利哉」と「夫救邯鄲」との間に「田侯曰、善。乃起兵、曰、軍於邯鄲之郊。段干綸曰、臣之求利且不利者、非此也。」という『史記』にはない記載があり、前後の話が通りやすくなっていることや、人名などの字句が若干異なっていることを除けば、ほぼ同一の文と言っても差し支えがないほどである。この事は、『史記』と『戦国策』のこの部分の記載に、少なくとも類似した資料が用いられていることを示している。

さて、今『戦国策』の記載だけを取り出し、その内容を概観してみよう。Z1は、「邯鄲之難」、すなわち桂陵の役の発端となった、魏が趙の邯鄲を囲った時の話である。趙に救援を頼まれた斉の田侯は、大臣達と出兵すべきか否か相談した。その際、助けない方がよいと主張したのが鄒忌であり、助けるべきだと主張したのが段干綸（『史記』は「段干朋」に作る）であったという内容になっている。

Z2の方は、『史記』のS2とS3を足したものとほぼ同じ記載になっている。大臣となった鄒忌と、将軍となった田忌とは仲が悪かったので、公孫閈（『史記』では「公孫閱」に作る）が鄒忌に、魏を攻めるよう王に献策するように説いた。勝てば鄒忌の功績になるし、負けてば将軍である田忌は殺されることになって、やはり鄒忌にとっては望ましい結果となるからである。鄒忌がそのようにしたところ、田忌は三戦三勝してしまった。そこで公孫閈は人に田忌の家臣を騙って謀反の占いをさせ、その現場を別の人に捕まえさせて、王の前で調べさせた。そこで田忌は出奔してしまった、という内容である。Z1もZ2も共に、いわゆる戦国故事を基にした故事資料と呼ばれる類の資料である。

ところで、『戦国策』の両者の文を比較してみると、この二つの話には、本来共通点といえるものはないということがわかる。Z1は桂陵の役の時の話であり、襄陵を攻めることには決定したものの、田忌を襄陵に派兵するとは書いていない。Z2は、鄒忌が田忌に魏を攻めさせた、とあるものの、そこには「襄陵」という文字は見えないし、桂陵の役

の時の話とは書いていない。つまり、この二つは本来、まったく別の独立した資料だったに基づいた、別の話であろうと考えられるのである。

ところが、『史記』の方を見てみると、引用S1、S2、S3の三つが、すべて桂陵の役に関係した、一連の話として書かれている。その結果、『史記』の桂陵の役に関する記載には、様々な矛盾が生じてしまっている。例えば、S1では斉威王が段干朋の計に従って、襄陵へ派兵することを決めたとしている。その際、騶忌は「不如勿救」と救援を出すことに反対しているのである。これに対して、S2では、同じ桂陵の役に際して、S1では出兵に反対であったはずの騶忌が、田忌に襄陵を攻撃させるよう威王に進言したことを、派兵の契機としている。この二つを共に斉が襄陵への派兵を決定する際に起こった話と考えると、辻褄が合わない。この事は逆に言えば、本来、S1とS2、S3とは、まったく関係のない話であったにもかかわらず、司馬遷が何らかの理由でこの三つをすべて桂陵の役に結びつけた可能性を示唆している。つまり、関係のない話を一連のものととらえたが故に、矛盾が生じてしまったと思われるのである。言い換えれば、この矛盾は田敬仲完世家の桂陵の役の記載が、二つの相異なる資料を基にして作られたことを示している。

矛盾が見えるのはこれだけではない。例えばS1の末尾に、「威王従其計」とある。「其の計に従った」とは、Z1の「乃起兵南攻襄陵」と併せて考えれば、威王が襄陵に派兵したということ示しており、従って、この文を読む限りでは、引用S1ですでに斉は襄陵へ派兵したことになろう。ところが、S2にも「使田忌南攻襄陵」とあり、ここでもまた襄陵に派兵したことを述べている。しかもS2の冒頭には「其後」とあって、S1とS2との間に時間的隔たりがあることを示している。つまり、この部分を読む限りでは、斉はこの時襄陵に二度派兵したことになってしまう。これは少々

奇異なことである。確かに、『水経注』淮水に引く『竹書紀年』には、

梁惠成王十七年、宋景壑、衞公孫倉會齊師、圍我襄陵。
十八年、惠成王以韓師敗諸侯師于襄陵、齊侯使楚景舍來求成、公會齊宋之圍。

とあるので、斉が二度に渡って襄陵を攻めたと考えられないことはない。しかし、『戦国策』楚策一邯鄲之難章に「斉秦両国が楚と呼応すれば、魏を破ることが出来る」、「楚はそこで景舎に軍を起こさせ、趙を救わせた」などとあり(6)、これと『竹書紀年』とを付き合わせて考えると、『竹書紀年』のこの部分の記載は、斉、宋、衛の三国がはじめに襄陵を包囲し、その後に楚軍が進攻してきた事を示していると思われ、従って一年間にわたって斉魏両軍の対陣が継続していたのではないかと推測できる。このことから、斉が襄陵に二度派兵したとは考えにくい(7)。

無論、S2の「其後」を、単に前後関係を表すだけで、時間的隔たりはそれほどなかった、つまりS1とS2の二つのエピソードは、前後してほぼ同時に起こったものであると考えれば、この矛盾を説明できないことはない。しかしこのほかにも辻褄の合わない部分がある。S3に「吾三戦而三勝」という語句が見える。ここでの「吾」は、話の内容から見ても、おそらく田忌の家臣のことを指すのではなく、田忌その人か、あるいは「我々、儂ら」という一人称複数として用いられていると考えた方が適当であろう。また、「三戦而三勝」については、何を相手に三戦して三勝したのか『史記』には明記されていないが、前後関係から魏を指すことは間違いない。その事は、Z2に「乃説王而使田忌伐魏。田忌三戦三勝」とあることからも明らかである。そして『史記』の前の部分に田忌が襄陵を攻めたとあることから、そ

の部分とのつながりも併せて考えれば、S3で言う「三戦而三勝」は、田忌が襄陵を攻めて魏を相手に三戦三勝したということを指しているのだと読み取れよう。ところが、前掲『水経注』引用には、「惠成王以韓師敗諸侯師、齊侯使楚景舍來求成」とあるので、これによれば襄陵において勝利を収めたのは魏の恵成王の方であったことになり、S2やS3の記載とはまったく相反する内容となっている。

こうした矛盾は、田敬仲完世家の桂陵の役に関する話が一つの資料に基づいて書かれていたならば生じるはずのないものである。むしろ上述のように、司馬遷が桂陵の役について書く際に、『戦国策』と類似した資料に取材はしたものの、その際本来は桂陵の役とはまったく関係のない資料までも取り込んでしまったためにこうした矛盾が生じたとしか考えようがない。そしてこの事は、桂陵の役についての田敬仲完世家の記載が、異説を含む複数の資料によって構成されていることを意味する。

では何故、司馬遷はこれらの資料を一連のものと考えたのだろうか。むろん、司馬遷が田敬仲完世家を編集する際、この二つの資料を誤って扱ってしまった可能性は十分にありうる。例えば、魏世家に「十八年、拔邯鄲。趙請救于齊、齊使田忌、孫臏救趙、敗魏桂陵」という記載がある。この記載は文体から判断して、おそらく紀年資料に基づくものと思われるが、ここには襄陵という文字は見えないものの、斉が趙の救援に応えて田忌、孫臏らを向かわせたとあることから、S1に見える「南攻襄陵」についても、襄陵を攻めたのは当然田忌と孫臏であろう、と司馬遷は考えたのかもしれない。また、Z1の末尾に、「南攻襄陵。七月、邯鄲抜。齊因承魏之弊、大破之桂陵」とあり、司馬遷がこの一節を「斉軍が襄陵を攻め、引き続いて魏を桂陵で破った」と、連続した出来事として読みとっていたのであれば、桂陵で戦ったのが田忌であるのは明らかなことから、襄陵を攻めたのも田忌に違いないと思い、S1とS2の話を一連のものと

誤解したのかもしれない。

しかし一方で、司馬遷が別の有力な根拠を持ってS1とS2の話を一連のものと考えた可能性を示唆しうる文献も存在する。山東省銀雀山漢墓出土の『孫臏兵法』擒龐涓に桂陵の役に関する記載があり、そこには「昔者、梁軍將攻邯鄲、使將軍忌涓帶甲八萬至於茬丘。齊君聞之、使將軍忌子帶甲八萬至……（以下欠）」「曰、若不救衞、將何爲。孫子曰、請南攻平陵」「將軍忌子召孫子問曰、吾攻平陵不得」など[8]、魏が邯鄲を攻めたのに対して斉も派兵し、将となった田忌が孫臏の言を容れて平陵を攻撃した事を示している。そして、ここに見える平陵とは、すなわち襄陵のことであるとも言われている[9]。もし平陵を襄陵とする説が正しいのであるならば、この事は田忌と襄陵を結びつける文献が漢代には存在していたことを示す証拠となるのであり、従って司馬遷がS1とS2の二つの資料を一連のものと考えたのも、こうした資料を参考にしたためかもしれないという類推が可能になる[10]。

この様に考えると、S1、S2、S3の三つの故事は、本来一連のものとして捕らえられていたのかもしれない。つまり『史記』の記載の方が、『戦国策』のそれよりも当時の桂陵の役に関する資料を正確に伝えているのかもしれないと推測する事も可能になる。確かに、『戦国策』のZ1とZ2とは、一見まったく関係しない独立した資料に基づいたものと思えるものの、これを二つとも襄陵への出兵の際の故事と考えることが不可能なわけではない。つまり、漢代において桂陵の役に関する資料は、一つしか存在せず、田敬仲完世家も『戦国策』斉策一も、それに基づいて書かれたと考えられないことはない。では、桂陵の役に関して、漢代には異説は存在しなかったのであろうか。『戦国策』の二つの記載が一見異説に見えるのは、修辞によってそう見えるだけで、本当はこの二つは共に桂陵の役に関する資料に基づいているのだろうか。『戦国策』の記載を読む限り、筆者にはそうは思われないが、仮にもしそうだとしても、『孫臏兵

法』に「曰、若不救衛、将何為。孫子曰、請南攻平陵」とあり、この部分が何処を攻めるべきかについての田忌と孫子の問答であることは明らかなことから、『孫臏兵法』の記載によれば、田忌ははじめ襄陵（平陵が襄陵であると仮定して）を攻めるつもりはなかったが、孫臏の進言によってそのようにしたという内容に作っているのに対して、田敬仲完世家では、襄陵を攻めることを決定したのは、段干朋や騶忌の献策を聞き入れた斉威王であり、田忌はその命に従って魏を攻めたことになっている。(11) つまり、襄陵を攻めることを決定した人物について、田敬仲完世家、『戦国策』と、『孫臏兵法』、孫子呉起列伝ではその間に異説が存在するのであり、それはすなわち、この事について複数の内容の異なる資料が当時存在し、司馬遷がそれに基づいて史記を書いたことを示している。

また、田忌の出奔についても、当時異説が存在した証拠が見える。引用S3にも見えるように、『史記』田敬仲完世家では田忌が出奔したきっかけを、彼が騶忌と公孫閲の奸計にはめられて身が危うくなったため、兵を率いて臨淄を攻めるも、勝てなかったことに置いている。『戦国策』斉策一（引用Z2）も、兵を率いて臨淄を攻めるという記載こそないものの、ほかはまったく同様である。ところが、『戦国策』斉策一田忌為斉将章には田忌出奔故事の原因と紀年に関して、まったく違ったことが書かれている。ここでは、馬陵の役後斉に帰還する途中で、孫臏が田忌に斉君を正し鄒忌を走らせるための具体的な方法を献策し、「そうしなければ将軍は斉に入る事が出来なくなりましょう」と忠告したにもかかわらず、田忌が聞き入れなかったため、果たして斉に入ることが出来なかったと記されている。(12) 史記索隠および梁玉繩や呉師道はこちらの方を是とし、田敬仲完世家に見える田忌出奔の記載を司馬遷の誤りとしている。(13) 例えば梁玉繩は、田忌の出奔が斉宣王二年の馬陵の役の後の事であるのは明らかだとした上で、司馬遷は戦国策斉策一成侯鄒忌為斉相章を誤って根拠としてしまったのだと言う。本稿は、はじめに述べたように『史記』に見える桂陵・馬陵の役の

記載の矛盾と、それが発生した理由について論じるものであり、歴史的事実が奈辺にあるのかを究明することを目的とするものではないので、それについてはここでは触れないが、いずれにしてもこの事が、田忌出奔に関して、漢代当時複数の異説が存在したことを示すものあることは間違いない。

三

続いて、馬陵の役に関する記事について考えたい。『史記』の記載をまとめると、馬陵の役において魏軍を率いたのは太子申と龐涓ということになっている。このうち太子申に関しては、魏世家に記されている話がある。

三十年、魏伐趙、趙告急齊。齊宣王用孫子計、救趙擊魏。魏遂大興師、使龐涓將、而令太子申爲上將軍。過外黃、外黃徐子謂太子曰、臣有百戰百勝之術。太子曰、可得聞乎。客曰、固願效之。曰、太子自將攻齊、大勝并莒、則富不過有魏、貴不益爲王。若戰不勝齊、則萬世無魏矣。此臣之百戰百勝之術也。太子曰、諾、請必從公之言而還矣。客曰、太子雖欲還、不得矣。彼勸太子戰攻、欲啜汁者衆。太子雖欲還、恐不得矣。太子因欲還、其御曰、將出而還、與北同。太子果與齊人戰、敗於馬陵。齊虜魏太子申、殺將軍涓、軍遂大破。（引用S4）

（魏恵王）三十年、魏が趙を伐った。趙は急を斉に告げた。斉の宣王は孫子の計略を採用し、趙を救い、魏を撃った。魏はそこで大軍をおこし、龐涓を将軍にし、太子申を上将軍とした。（魏軍が）外黄の地を通り過ぎた。外黄の徐子が、太子に「私に、百戦百勝の術がございます」と言った。太子は「お聞かせ願えないか」と言った。徐子は、「もとより献策いたしたいと願っております」と言った。「太子御自身が軍を率いて斉を攻め、大勝して営を併合したと

しましても、富は魏を保つにすぎませんし、尊貴は王となる以上のものではありません。もし戦って斉に勝てなければ、永久に魏を失うことになります。これが臣の百戦百勝の術です」太子は言った。「わかった。必ず貴公の言葉に従って、帰ることにしよう」徐子は言った。「太子がお帰りになろうとなさっても、出来ますまい。太子に戦うよう勧めてうまい汁を吸おうとしているものは大勢おります。太子がお帰りになろうとなさっても、恐らくは無理でしょう」太子はこれを機に帰ろうとした。御者が言った。「将軍として出陣しながら戦わずに帰るのは、逃げるのと同じです」太子はついに斉と戦い、馬陵で敗れた。斉は魏の太子申を虜にし、将軍龐涓を殺した。魏軍はかくして大敗した。

また、『戦国策』宋衛策[14]魏太子自将過宋外黄章にも、

魏太子自将、過宋外黄。外黄徐子曰、臣有百戦百勝之術、太子能聽臣乎。太子曰、願聞之。客曰、固願效之。今太子自将攻齊、大勝并莒、則富不過有魏、而貴不益爲王。若戦不勝、則萬世無魏。此臣之百戦百勝之術也。太子曰、諾。請必從公之言而還。客曰、太子雖欲還、不得矣。彼利太子之戦攻、而欲滿其意者衆、太子雖欲還、恐不得矣。太子上車請還、其御曰、將出而還、與北同、不如遂行。遂行。與齊人戦而死、卒不得魏。（引用Z4）

とある（訳出は省略）。S4とZ4とを比較してみると、やはり字句や表現に若干の差異があることを除いて、内容はほぼ同じといってもよいほど類似している。しかし、S4の末尾には、「齊虜魏太子申、殺將軍涓」とあり、太子申がと

らえられ、龐涓が殺されたという結末になっているが、『戦国策』の方では、「與齊人戰而死」と、太子申は馬陵の戦いで死んだという話に作っていて、この点において矛盾がある。今試みに、『史記』と『戦国策』に見える太子申と龐涓の最後についてまとめてみよう。

虜魏太子申、殺將軍涓（魏世家）
齊虜我太子申、殺將軍龐涓（六国年表魏恵王三十年条）
殺其將龐涓、虜魏太子申（田敬仲完世家）
（龐涓）乃自剄、…（中略）…虜魏太子申（孫子呉起列伝）
虜其太子申、殺將軍龐涓（商君列伝）
禽太子申（魏策二斉魏戦於馬陵章）
係梁太子申、禽龐涓（斉策一田忌為斉将章）
（太子申）與齊人戰而死（宋衛策魏太子自将過宋外黄章）
齊大勝魏、殺太子申（魏策二斉魏戦於馬陵章）

一見してわかるとおり、『戦国策』宋衛策魏太子自将過宋外黄章と魏策斉魏戦於馬陵章は、太子申は馬陵の戦いで戦死したとしており、その他は皆捕虜になったとしている。また龐涓についても、斉策田忌為斉将章は「禽龐涓」につくり、『史記』の記載とあわない。これらの矛盾は何を意味するのだろうか。例えば太子申については、彼が馬陵の戦い

において死んだとする記載は、『史記』には全くなく『戦国策』にのみ見えるものであり、しかもわずか二篇にそう書かれているに過ぎないことから、これを劉向の誤りと考えることもできよう。しかし、『孟子』梁恵王上に「寡人之身、東敗於齊、長子死焉」とあることや、『戦国策』秦策謂秦王章に「梁君…（中略）後子死」ともあり、これらが太子申の死を指していることを見れば、彼が馬陵の役で死んだというのはあながち根拠のない話でもなさそうである。もちろん、「虜」「禽」「係」など字を、この場合は捕虜とした後に殺したことを意味していると解釈すれば、何も矛盾は生じない。しかしそれでも、孫子呉起列伝が龐涓の死を自刎であるとすることと、斉策田忌為斉将章に龐涓をとらえたことを示す「禽龐涓」という記載があり、また『孫臏兵法』の擒龐涓篇にも同様に「禽龐涓」とあることとの間は依然として食い違いが残る。

この様な矛盾が存在するという事実は、太子申と龐涓の結末について、『史記』や『戦国策』の元になった原資料に何種かの異説が存在していたことを示唆する。特に「禽龐涓」という記載のある『孫臏兵法』擒龐涓の内容が、馬陵の戦いではなくその前の桂陵の戦いについて述べられたものであり、従って『史記』『戦国策』とはまったく符合しないということが、その事を傍証していると考えられる。(15)

馬陵の役に際しても、桂陵の役の時と同様、斉国において出兵するべきか否かという話し合いが行なわれている。田敬仲完世家に、

二年、魏伐趙。趙與韓親、共擊魏。趙不利、戰於南梁。宣王召田忌復故位。韓氏請救於齊。宣王召大臣而謀曰、蚤救孰與晚救。騶忌子曰、不如勿救。田忌曰、弗救、則韓且折而入於魏、不如蚤救之。孫子曰、夫韓、魏之兵未獘而救

之、是吾代韓受魏之兵、顧反聽命於韓也。且魏有破國之志、韓見亡、必東面而愬於齊矣。吾因深結韓之親而晩承魏之弊、則可重利而得尊名也。宣王曰、善。乃陰告韓之使者而遣之。韓因恃齊、五戰不勝、而東委國於齊。齊因起兵、使田忌、田嬰將、孫子爲師、救韓、趙以擊魏、大敗之馬陵、殺其將龐涓、虜魏太子申。（引用S5）

（斉宣王）二年、魏が趙を伐った。趙は韓と親交があったので、共に魏を撃った。趙は不利となり、南梁で戦った。宣王は田忌を召して、もとの地位に復帰させた。韓は斉に救援を頼んだ。宣王は大臣を召して謀って言った。「早く救援するのと、遅く救援するのと、どちらがよいだろうか」駟忌が「救わないにこしたことはありません」と言った。田忌が言った。「救援しなければ、韓は屈服して、魏のものとなってしまいましょう。早く救うにこしたことはありません」孫臏が言った。「そもそも韓・魏の兵がまだ疲弊しないのに救援をしてしまえば、これは韓の代わりに我らが魏の兵を引き受けることになってしまい、かえって韓の命を聴くことになってしまいましょう。その上、魏は韓の国を撃ち破ろうと思っているのですから、韓は（自国が）滅びようとしているのを見て取れば、必ず東面して斉に救いを訴えて参りましょう。ですから、我らが韓と深く親交を結んでおき、時間がたってから魏の疲弊した後を受ければ、大利と尊名を得ることが出来ましょう」宣王は「よかろう」と言い、密かに韓の使者にこのことを告げて帰した。そこで韓は斉を頼みとし、五度戦ったが勝てず、東面して斉に国運をゆだねた。斉はそこで兵を起こし、田忌・田嬰を将軍とし、孫臏を軍師にして、韓・趙を救援させ、魏を撃って馬陵にて大敗させ、将軍龐涓を殺し、魏の太子申を捕虜にした。

ところで、『戦国策』斉策一にも、これとよく似た文がある。日本語訳は省略する。

南梁之難、韓氏請救於齊。田侯召大臣而謀曰、早救之、孰與晚救之便。張丐對曰、晚救之、韓且折而入於魏、不如早救之。田臣思曰、不可。夫韓、魏之兵未弊、而我救之、我代韓而受魏之兵、顧反聽命於韓也。且夫魏有破韓之志、韓見且亡、必東愬於齊。我因陰結韓之親、而晚承魏之弊、則國可重、利可得、名可尊矣。田侯曰、善。乃陰告韓使者而遣之。韓自以專有齊國、五戰五不勝、東愬於齊、齊因起兵擊魏、大破之馬陵。（引用Z5）

斉策一の方も話の流れは『史記』とまったく同じである。しかしここで問題になるのは、この二つ意見の発言者が、『史記』と『戦国策』とで異なっているということである。『史記』では、「早く救援するべき」と発言するのを田忌に作り、それに対する反論の発言者を孫子としているが、『戦国策』では、前者を張丐、後者を田臣思に作っている。田臣思とは、すなわち田忌のことであると考えられており[16]、従って田敬仲完世家においては前者の説の発言者である田忌が、『戦国策』ではそれに反論する後者の意見を述べているという矛盾をきたしている。これもまた、この話について漢代に異説が複数存在したことを示す事例であると考えられる。

四

以上述べてきたように、桂陵・馬陵の役に関する『史記』や『戦国策』の記載には、両者の間で、あるいは他の文献との比較において、様々な矛盾が見られる。そしてその矛盾は、漢代にそれらの故事に関して、複数の異説が存在した可能性を示すと考えられることを述べた。

無論、『史記』と『戦国策』との間には、桂陵・馬陵の役に関して、上述した以外にも人名や地名等の不一致、矛盾は多数見られる。またこの事は、桂陵・馬陵の役に関する記載に限らず、『史記』『戦国策』全体に通じていえることである。その中には勿論、司馬遷や劉向が資料の扱いを誤ったことに起因するものも多数含まれようが、それ以外にも、異説の存在を想定しないと、解決できないものも多いと思われる。では、そのような異説が複数誕生した背景にはどのような社会状況が存在したのであろうか。こういった資料が生まれてきた過程と、それを支えた社会背景とについて考えてみたい。

『史記』や『戦国策』が取材している戦国故事が、最初は書信や進言の内容だけを記したシンプルな構造であったものが、後には歴史背景や人名、さらにはその故事に対する評価などが加えられ、複雑かつ物語的要素の強い構造に発展したということについては、すでに指摘がある(17)。この事はおそらく、戦国以降の諸子学の徒、すなわち当時の学問集団が故事資料を利用していったことと無関係ではあるまい。つまり、諸子学派によって人名や歴史背景が加えられることで、その話の信憑性を高める効果が生まれ、さらにそういう手段を経てもっともらしくなった故事を諸子学の徒が述べることによって、自らの思想を表現したり、またそこに取り上げられる人物の業績を称揚したりした結果、故事の評価が加えられたと考えられるのである(18)。この様な、いわば故事の加工とでもいう行為が諸子学派の手によって長期間にわたって大規模に行なわれれば、加工の結果、歴史的事実とはかけ離れたものになってしまったことも当然あったはずである。つまり、ある故事の内容が、本来それとはまったく関係しない人物や地理、歴史背景にいわば仮託されてしまうわけである。『史記』趙世家や『戦国策』趙策二の武霊王平昼間居章に見える胡服採用の記事が、商君列伝や『商君書』更法篇に記されている商鞅変法に関するそれと類似が見られることは、呉師道などによってすでに指摘されており、鐘

鳳年に至ってはこれについて「『戦国策』のこの部分と『史記』は、共に『商君書』更法篇に取材しているのだろう」と断定している[19]が、これなどもむしろ一つの故事に複数の人物が仮託された結果によると考えられよう。つまり、仮託された結果異説が生じるのである。上述の桂陵・馬陵の役に関する矛盾も、元は同じ内容を持つ話にそれぞれ違った人物が仮託された結果、この様なことが起きてしまったものと思われる。

続いて、こうした故事資料における仮託が、どのような理由によって起こったのかについて考えてみたい。無論、仮託をした側に歴史事実の誤認や間違いがあったことによって起こったものも当然あったであろう。しかし、そればかりでなく、このような仮託が意図的に行われたと思われる節もある。『史記』蘇秦列伝の論賛には、「然世言蘇秦多異、異時事有類之者皆附之蘇秦。夫蘇秦起閭閻、連六國從親、此其智有過人者。吾故列其行事、次其時序、毋令獨蒙惡聲焉」という司馬遷の言が見える。これはすなわち、漢代までに「違う時代のことでも、似ているものであれば、皆蘇秦の事跡とする」こと、すなわち故事資料の蘇秦への仮託が行なわれていたという事を司馬遷が認識していたことを示すものであるが、では何故、仮託の対象が蘇秦だったのだろうか。それは、蘇秦が縦横家の開祖の一人であり、司馬遷の言うように「貧富の境遇から身を起こし、六国合従を成し遂げた、人並み優れた知謀の持ち主」として認識されていたからであろう。

同様の事が、孫子（孫武）に関する『史記』の記載についても言える。孫子呉起列伝には、孫武が呉王闔閭に試され、宮中の婦人を兵として訓練するという有名な話が載っている。また、これとよく似た話が、山東省銀雀山漢墓から出土した『孫子兵法』にも記されている。これは故事というよりはむしろ説話に属する話であって、まったくの荒唐無稽ともいうべきものであり、これが歴史事実だとは考えにくい。しかしここで注目すべきは、この様な説話が『孫子兵

法』という兵家の書物の中の一篇として記載されていたということである。この事はすなわち、少なくとも漢代当時には、この説話が、孫子の兵法思想について述べられているいわば『孫子』の経文（という言い方は適切ではなかろうが、仮にこう呼んでおく）とも言うべき重要な諸篇と共に、『孫子兵法』という一つの文献の構成要素をなすと見なされていたことを意味する。言い換えれば、この説話は、『孫子』の経文諸篇と同等といってもよいほどの地位を有していたと考えられる。では何故、この説話がそれほどの重要性を持っていたのだろうか。何故この説話が、『孫子兵法』の中の一篇として取り入れられたのであろうか。それは、この説話が孫子の偉大さ、有能さを示すものであるからに違いない。つまり、孫子は宮中の婦女ですら有能な兵士に仕立て上げるほどの人物であったのだという事を示すことによって、彼の兵法家としての能力を称揚し、また同時に、そういう人物を開祖にしている自分たちの学派の地位を押し上げ、その主張の正当性を高めようとしたためではなかろうか。

このような状況を背景に、諸子学派によって多くの故事・説話資料が加工され、利用されてきたということは、逆に言えば、諸子に関係した大量の故事・説話資料が後世に流伝したことを意味する。史記の列伝のうち戦国期以前のものについては、その多くが例えば『漢書』芸文志に記された文献の題に名前が見える、所謂学派の開祖と考えられる人物を取り上げたものであるという事実は、この事との関係をうかがわせる。つまり、こうした人物に関する資料が相対的に多かったという、ある種の資料的制約が、諸子に関する列伝の量の多さになって現れたと推測されるのである。この事は、春秋期以前の列伝、すなわちより古い人物を題材にしたものに限定すると、伯夷列伝を除くすべてが学派の開祖達を題材としたものとなっている[20]ことからもうかがえる。また、これら諸子に関する列伝は、ほぼ著名なエピソードだけで完結しており、その失脚や死に至る記載がないという特色を持つことが指摘されている[21]が、先の孫子説話の例のよ

うに、諸子によって利用された説話が、その学派の開祖を称揚する役割を果たしていたという側面があった以上、失脚や死など、負のイメージを抱かせる内容は少ないに違いなく、従ってそれらに基づいて編集された諸子の列伝もまた、そういった性格を帯びることは当然であろう。

『史記』や『戦国策』の故事もまた、そうした諸子学派集団の手を経て残された資料に基づいているものが多くあり、それ故に複数の異説が存在し、互いに矛盾する結果となってしまったと考えられる。さらに、学問集団によって故事・説話資料が吸収され、利用されるという状態が大規模に、かつ長期間にわたって行なわれれば、必然的にこういった故事・説話資料に関する当時の人々の意識の向上という結果を導くことが想像できる。つまり、諸子学派に属する人たちが故事や説話を目にすることによって、彼らの関心が次第にこうした資料そのものに向いていくこともあったのではないか。また、学問といういわば「高級な」作業に携わる人々が故事や説話を利用した結果、こうした故事・説話の地位が自然に向上したという事も考えられよう。こうした流れと、『漢書』芸文志に見える「小説家」の存在、さらには後漢・南北朝における小説の誕生と隆盛とは、決して無関係なものとは思われないが、それについての研究は今後の課題とするつもりである。

注

（1）例えば、宮崎市定「身振りと文学―史記成立の一試論」（『中国文学報』一九六五年第二十号）などを参照。

（2）例えば馬王堆漢墓から出土した『戦国縦横家書』と、『戦国策』との比較研究などがある。佐藤武敏監修、工藤元男・早苗良雄・藤田勝久訳註『馬王堆帛書戦国縦横家書』（朋友書店、一九九三）などを参照。

（3）なお、本稿では、人名や地名、歴史背景などの矛盾を専ら取り上げる。史記にはこの他に、紀年に関する矛盾も多く指

摘されているが、ここでは取り上げない。

（4）本稿では、論をわかりやすくするため、重要な引用には記号をつけて示す。例えば、ここで言う「引用S1」の「S」は、『史記』を表している。同様に「Z」は『戦国策』を表す。なお、「S1」と「Z1」のような数字の共通は、共に同じ内容を持つ引用であることを示している。以下同じ。

（5）『戦国策』の引用は、特に断りのない限り、清嘉慶八年黄丕烈刊刻姚宏本を基にした標点本『戦国策』（上海古籍、一九八五重版）に依っている。以下同じ。

（6）邯鄲之難、昭奚恤謂楚王曰、王不如無救趙、而以強魏。魏強、其割趙必深矣。趙不能聽、則必堅守、是兩弊也。景舍曰、不然。昭奚恤不知也。夫魏之攻趙也、恐楚之攻其後。今不救趙、趙有亡形、而魏無楚憂、是楚、魏共趙也、害必深矣。何以兩弊也。且魏令兵以深割趙、趙見亡形、而有楚之不救己也、必與魏合而以謀楚。故王不如少出兵、以為趙援。趙恃楚勁、必與魏戰、魏怒於趙之勁、而見楚救之不足畏也、必不釋趙、趙、魏相弊、而齊、秦應楚、則魏可破也。楚因使景舍起兵救趙。邯鄲拔、楚取睢、濊之間。

（7）平勢隆郎『新編史記東周年表』（東京大学出版会、一九九五）では、『竹書紀年』のこの記載のうち、十七年を立年称元法による年代、十八年を踰年称元法に基づく年代だとして、この二つを同じ年に繋年している。この説に従うと、この部分は同じ年に起こった同じ襄陵の戦いについて記されたものという事になり、いずれにしても斉が二度襄陵に派兵したとは考えられない。

（8）『孫臏兵法』の引用は、銀雀山漢墓竹簡整理小組「臨沂銀雀山漢墓出土『孫臏兵法』釈文」（『文物』一九七五第一期、のち同小組『孫臏兵法』文物出版社、一九七五や同小組『銀雀山漢墓竹簡』文物出版社、一九七五に所収）と張震沢『孫臏兵法校理』（中華書局、一九八四）の釈文を参考にした。

（9）例えば張震沢前掲『孫臏兵法校理』附の「平陵考」などを参照。

（10）なお、平陵釈地についてはこの他にもいくつかの説があり、未だ定まった結論を見てはいない。趙振鎧「《孫臏兵法・擒龐涓》中幾個城邑問題的探討」（『考古』一九七六年第十期）、黄盛璋「《孫臏兵法・擒龐涓》篇釈地」（『文物』一九七七年第二期）等を参照。

（11）孫子呉起列伝には、襄陵を攻めるという記載は見られないが、田忌が孫臏の進言を容れ、当初とは異なる目的地へ軍を

進めたというプロット自体は『孫臏兵法』と共通し、この点が田敬仲完世家の記述とは異なる。

(12) 田忌爲齊將、係梁太子申、禽龐涓。孫子謂田忌曰、將軍可以爲大事乎。田忌曰、奈何。孫子曰、將軍無解兵而入齊。使彼罷弊於先弱守於主。主者、循軼之途也鍉擊摩車而相過。使彼罷弊先弱守於主、必一而當十、十而當百、百而當千。然後背太山、左濟、右天唐、軍重踵高宛、使輕車銳騎衝雍門。若是、則齊君可正、而成侯可走。不然、則將軍不得入於齊矣。田忌不聽、果不入齊。

(13) 梁玉繩『史記志疑』、呉師道『戦国策校注補正』

(14) 鮑本では魏巻恵王に置く。

(15) またついでに言及すると、『史記』の馬陵の役に関する記載には、ほかにもいくつかの矛盾があることがすでに指摘されている。例えば梁玉繩『史記志疑』によれば、引用S4の冒頭には「魏伐趙、趙告急齊」とあり、「魏が趙を攻めたので趙は斉に救援を求めた」という内容であるのに対し、田敬仲完世家の宣王二年の条では、「魏が趙を伐ち、趙は韓と親しかったので共に魏を撃った。趙が南陵で破れたので、韓は斉に救いを求めた（魏伐趙。趙與韓親、共擊魏。趙不利、戰於南梁…（中略）…韓氏請救於齊）」となっており、さらに孫子呉起列伝では、「魏と趙が韓を攻め、韓は斉に救援を求めた（魏與趙攻韓、韓告急於齊）」と記されていることから、この三つの記載は互いに矛盾しているというのである。また中井積徳『史記彫題』によれば、同じくS4に「齊宣王用孫子計、救趙擊魏。魏遂大興師、使龐涓將、而令太子申爲上將軍」と、斉が軍を送ってきたのに対して、魏はすぐに大軍をおこしたという内容になっているが、孫子呉起列伝によれば、斉が援軍を派遣したので、魏は（新たに軍をおこしたのではなく）征韓の軍を返した事になっていて（齊使田忌將而往、直走大梁。魏將龐涓聞之、去韓而歸）、互いに食い違いがある。中井積徳はこれについて、孫子呉起列伝を是とし、魏世家を誤りとしているが、『戦国策』魏策二魏恵王起境内衆章にも、「魏恵王起境内衆、將太子申而攻齊」と魏世家と同様の記載が見られることから、これがまったく根拠のない話でもないことが分かり、むしろこういった記載の矛盾は、『史記』や『戦国策』が編集された漢代においてすでに、馬陵の役に関して互いに内容の食い違う資料が存在していたことを裏付けるものと考えた方が妥当であろう。

(16) 考証は方詩銘・王修齢『古本竹書紀年輯證』（上海古籍出版社、一九八一）に詳しい。

(17) 藤田勝久「馬王堆帛書『戦国縦横家書』の構成と性格」（『愛媛大学教養部紀要』、一九八六年十九号）

(18) 『戦国策』にその典型が認められる故事資料と、縦横家との関わりについては、すでに劉向が『戦国策』序文で述べている。また、金谷治「孟子の研究」(『東北大学文学部年報』、一九五〇年第一号)には、『孟子』が編集される際、この様な戦国故事に基づいたことが述べられている。さらに、『孫臏兵法』擒龐涓において、桂陵の役の様子について述べられているが、この末尾に「故曰、孫子之所以爲者盡矣。」という評価の言葉があり、これが孫臏自身の発言ではなく、後人の手によることは明らかなことからも、これが孫臏を称揚するためのものであったことは明らかである。

(19) 鐘鳳年『国策勘研』(『燕京学報』専号之十一、一九三六)

(20) 仲尼弟子列伝については、これを学問の開祖を取り上げたものと考えるのは適当ではなかろうが、諸子との関係が非常に深いことは疑いをえない。

(21) 藤田勝久『史記戦国史料の研究』(東京大学出版会、一九九七)